

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】アローハン (阿如汗)

【所属】(助成決定時) 神戸大学大学院国際文化学研究科・博士後期課程

【研究題目】清末から中華民国初期の内モンゴルにおける近代学校教育の展開と知識人の育成

【研究の目的】(400字程度)

清王朝末期の光緒 28 (1902) 年に、内モンゴルの最初の近代的な学堂である崇正学堂がハラチン右翼旗 (喀喇沁右翼旗) の旗長グンサンノルブ (貢桑諾爾布) によって創設された。彼は、明治 36 (1903) 年に日本に招待され、その影響下で日本人教師を招いて、守正武備学堂と毓正女学堂をも設けた。清朝が崩壊して中華民国になると、グンサンノルブはモンゴル・チベットを管理する蒙蔵事務処 (1914 年から蒙蔵院と改称される) の総裁となり、北京に国立蒙蔵専門学校 (のち、北平蒙蔵学校と改称。) を設立させる。一方、清末の新政やそれに続く中華民国の教育政策、日本側の樹立した満洲国や蒙疆政権の教育政策によって、内モンゴルの各地にも近代的な学校教育が次々と創設されていく。こういったモンゴル人エリートを養成しようという上からの政策とモンゴル王公の思惑の下で、近代的な学校教育は具体的にどのように展開され、それが内モンゴルの近代史にいかなる影響を及ぼしたのであろうか。この問題の解明が本研究の目標である。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究助成期間においては、2つの研究を行った。

(1) 日露戦争直前のハラチン右翼旗における日本人教師招聘活動について検討した。1903年、ハラチン右翼旗の旗長グンサンノルブは、日本政府に招待されたことをきっかけに、日本の陸軍軍人を招聘して軍事教育を試みた。その際、ハラチン右翼旗で軍事教官を務めた伊藤柳太郎は、後に日露戦争時の特別任務班第一班に加わって活動した。その後任として赴任した河原操子についても「日露戦争後、勲六等に叙せられ、宝冠章を賜りました」と自伝の編者によって解説されている。本研究では、日露戦争直前に日本陸軍がグンサンノルブの学堂創設に協力した点に関して、当時の国際的な政治情勢と連動させて考察したうえで、このような軍人招聘活動を歴史的にどう位置づけるべきかについて検討した。本研究の実施にあたっては、日本の防衛省防衛研究所図書館 (アジア歴史センター) などの

関係史料を用いた。本研究は、まもなく論文として査読付学術雑誌に掲載される予定である。

(2) 清末のハラチン地域と帰化城トゥメト地域における近代的学校教育の開始状況を、現地档案史料に基づいて、実証的に検討した。清王朝末期以降の近代内モンゴルにおいては、東南部のハラチン地域と中西部の帰化城トゥメト地域が、代表的な知識人輩出地として有名である。しかし、今までの研究がハラチン右翼旗におけるグンサンノルブの学堂創設を中心に行われてきたのに対して、本研究ではハラチン中旗や左翼旗などその他のハラチン地域、また帰化城トゥメト旗での初期の教育がいかなるものであったのかという問題の解明に努めた。以上の問題を実証するために、これまで入手してきた史料に加えて、中国第一歴史档案馆、トゥメト左旗档案局等の関係史料を入手し、中国国家図書館、北京大学図書館、北京師範大学図書館、内モンゴル社会科学院、内モンゴル師範大学でも史料調査を実施した。本研究は、本年5月に学会で発表した後、学術雑誌に投稿する予定である。

【結論・考察】(400字程度)

グンサンノルブは日本陸軍によるロシアに対抗するための軍事的な意図をさほど気にとめることなく、純粹に日本陸軍軍人を招いて軍事教育の振興を行うことのみを考えていたようである。しかし、日本の陸軍参謀本部は、情報収集活動のために、陸軍軍人を教習として清国に派遣していたわけであり、そのうちのハラチン右翼旗に派遣されたのが伊藤柳太郎らであった。グンサンノルブは日本陸軍参謀本部のこのような計略の上に乗った状態で学堂建設をおこなったと言えるだろう。

一方、清末の内モンゴルにおいて、ハラチン右翼旗以外のハラチン地域や帰化城トゥメト地域で初期の教育が始まるのは、グンサンノルブの学堂創設の影響ではなく、1904年に清王朝初の近代的学制を定めた「奏定学堂章程」の公布後のことだとわかった。また、両地域とも、近隣の漢人居住地域よりもやや遅れた時期に始まっている。両地域を比較すると、近代学堂運営については、帰化城トゥメト地域の方がより厳しい管理の下で行われていたということがわかる。